〔愛知の児童文化研究　5〕

子ども祭りに見る日本文化の源流

——（2）かあか祭りの場合——

角　田　茉瑳子

愛知県渥美郡渥美町大字中山字北郷の各神社で、旧暦9月15日に子供達で「かあか」という祭りを行う。「かあか」とは、この祭りに加わる子供達の唱え言葉からでた俗称であって、正しくは「御祭宵宮の通夜」という。

この祭りの起源や由来については全く記録がなく判然としない。俗に「乞食祭り」とかその他色々な説があるが、私はこの祭りの起源をさぐり、持っている意味を調べることにより日本文化の源流を探ってみたい。祭りは子供が行うものであるが、そこに秘められた意味は決して子供のものではなく、その土地で生きていた人々の願いであり、民族の精神文化につながると思うからである。

祭りの概要

現在行われている祭り様式は、簡略化されているので、小中山の『漁民風俗誌』を参照しながら戦前の様式を述べる。

この祭りは7歳から16歳までの少年達で行う。祭りは村社六所神社を第1位とし、分社として田戸神社、御嶽神社、金比羅神社、池の神社、医王寺の順に奉祀参拝しなければならない。子供達は6組に分かれ、各々の神社、分社に奉祀する。1組15人から20人の少年奉仕団は、各組毎に最年長者を大将とし、次の年長者を副将とする。大将と副将は1人とは限らず、時には2人、3人となることがある。団員は皆「烏」と呼ばれ、1年2年の者は特に「小烏」又は「宵烏」と呼ばれている。烏達は、旧9月1日から祭の準備に取りかかる。各組奉仕の神社社頭に集まって、大将の指揮命令に従って神社境内の掃除を初め、祭礼5日前には干潮時に浜辺の浜砂利の陸揚げをし、社前へ運ぶ。この浜砂利は「御白石」と呼ばれる黒い丸石で、社前の燈籠と華表、社殿の前へ運び入れられる。「御白石」の浜上げは、各組の烏達が干潟の出洲に小舟を出して行う。各々が良き丸石を早く、沢山に拾い上げようとする競争ばかりでなく、相手方の仕事の進行を阻止する。舟と舟とを衝突させ、揺すり合い、沈め合う。そして自分の組の舟が第一番に浜上げが出来れば「縁起が良い」と喜び喚声を上げる。「御白石」の準備と共に、5日頃「バチ切り」が行われる。各々の神社の境内の森で、板太鼓を打つバチ（撥）を烏達に2本宛切る。そのバチは、干潮時に15日の朝まで砂浜を掘って埋め、祭りの当日掘出される。これと共に板太鼓用の板として、出来る限り新しく清い舟板を選んで抜出す。板太鼓は副将の次位、即ち6年生が打ち、5年生以下の烏共は板太鼓は許されず、拳大の丸いグリ石を打つ（現在は皆板太

鼓を打っている)。綱仲間からは、一対の塩漬の赤鯛を左右背を開いて藁を通し、その藁の端を結び合せたものが献納される。その結び目に「某綱大漁満足」と墨書した木札を、頭に麻糸を通して結び合わせ下げる。この献納品は祭日神前の右の方に、丸太で目通りの高さに作られた台に掛けて飾る。又、神殿へ通う路の片側に、四方を蓆で囲んだ一坪ほどの大将の居る小屋を作る。入口の蓆は上から吊して垂らし、出入り出来るようにする。蓆の上に座った大将の前にはお白餅を入れるお櫃が置かれる。傍らには古い木札を利用して中央に釘をたて、蠟燭をともす。当日は入口の蓆戸を下ろして座った大将は、副將を伝令役として、烏全体を統帥する。神前には、参詣の人々がお白餅を供えるための板の台が置かれる。烏達は社殿の前へ菰を敷いて座を定め、板太鼓を真中に、左右に居並ぶ。副將はお白餅を運ぶ丸い弁当箱を用意して、大将の小屋側に待機する。夕方から烏達が位置について両手のバチで板太鼓を叩き、グリ石を打ち合せ、謡い始める。その時烏の座っている横の土に穴をほり、松のたきぎをもやす。

「……様へも（自分の持ち場の神名を唱える）お白餅よー　食いたい　カアカア。いくよな　くるよなたよたよ。おたよのたよたよ」

祭りが始まると、村人達は礼装をつけ、午前中に7合の新米を石臼でひいて粉にし、水で練ったお白餅を重箱に入れ、一家そろって参拝に出かける。重箱は一家の最長老の婦人が持っていく。社殿へ入ると、村社の裏の森にある女竹で作った取り箸で、お白餅の一部を切り取って社前の供へ板に奉納し、祈る（今は烏達にも供える)。参詣の村人は第1番に村社、次に田戸神社、3番目に金比羅神社、4番目に御嶽神社、5番目に池の神社、最後に医王寺（村人の菩提寺）と、皆同じようにお白餅の一部を供えて祈念巡拝し、家へ帰って竹箸を神棚に飾る。お白餅が供え板に盛られていくと、副將達が弁当箱に入れて大将の所へ運んでいく。参詣人の数が薄らぐと、大将の前に集まった宵烏達や烏達に投餅大のお白餅が分与され、帰宅命令が下される。祭りが終ると副将達は弁当箱に盛り切り2杯宛の御白餅を分与される。残りは大将のものとなる。なお、烏達の分け前は、祭り当日までの働きぶりに応じて決められる。翌16日、烏達は小屋をとりこわし、板類を元の場所に返し、バチを社裏の森へ納めて祭りを終える。

この祭りは中山の神明社と八柱神社でも、旧暦9月11日の宵宮に行われていた。中山では、小中山とは逆に、村人ではなく烏がお白餅と、水で割った神酒を参詣人に与える。そして唱え言葉も「天王さんにお白餅あげたら、おらもくいたいカーアカア　いくよも　くるよも　おたよーたよ　おたよのたよたよ」となる。そのため中山ではこの祭りを ＜おたよのたよたよ祭り＞ という。神明社では大正14年頃この祭りを中止したが、八柱神社（昔は八王子神社といった）では今も続けて行われている。この祭りは、「神前勤方行司荒木田家諸式傳」に明記され、内容は中山も小中山の神官川口家のも同じで次のようである。

9月御祭、14日家内潔斎末社の祭。しめ縄を張なり。同15日御闔を開き、宝物を飾る。綱方より御掛魚上る。夜祭なり。神供、白餅、神酒を献ず。参詣の輩へ神酒、供物を頂す。子供通夜する。太鼓をたたきて参詣の者来ると、タヨタヨと云事を略してタヨウタヨウと呼ぶなり。是、当社の神支

の古例なり。16日朝八王子社へ祭りをすまし正四つ時若者神楽獅子を奉る。是にて神叉の終なり。

この式次第は現在中山で行われている祭りと同じである。「神叉の古例なり」というからには、この祭りの形態で古来から続いていたということで、めまぐるしく変る現在でさえもその原型を残しているめずらしい祭りなのである。以上のことから、私は中山での ＜おなよのたよたよ祭り＞ を調べることとする。

祭りの沿革

渥美郡の最先端西の浜には、縄文期、弥生期の古墳郡が密集している。『藤原古墳郡』の付載部分を精読するとつぎのようになる。

寛保3年（1743年）に中山村の郷土史家度会広文が書いた『鎮守御鎮座並ニ摂末社勧請考』（御鎮座記）及び、大正7年12月に村社神明社社務所から県知事宛に呈出された「指定供進神社申請書」から、この西の浜海岸は「虎野」という地名であることがわかった。しかも申請書中「由緒調」の附記に「三河国渥美郡中山邑字西山刀良埜鎮座神伊セ両大神村上帝治天徳ニ戊巳年九斎祭比海濱ナリ」とあるから、この地の鎮座神と伊勢両大神の祭りが天徳ニ戊巳年（958年）9月から、斎祭としてこの虎野の海浜で行われていたことがわかる。つまり猿投神社（豊田市）に現存する『参河国内神明名帳』（慶安2年書寫。原本は鎌倉時代のものと思われる）にあげられている旧渥美郡内の大明神三座の中の一つ、従三位寅之大明神がこの地の鎮座神なのである。そしてこの地に昔の中山村の集落の一部があった。広文の御鎮座記によれば、延徳年間（1489～1492年）兵火の為中山村が焼失するまで、この地の社は虎野大明神或は虎野神社と呼ばれていたが、延徳以降は中山明神となり、慶長の頃（1596～1614年）領主清水氏の御祈願所となるに及んで、この地は「大宮の森」と呼ばれるようになり、「虎野」と呼ぶ人がなくなったという。

虎野大明神は延徳以降、中山村の鎮守となり中山大明神とよばれ、寛永15年（1638年）に、藤原（大森）から現在地（中山字神明前）に遷座された。その後虎野には小祠大森社が祀られたが、明治38年に陸軍射撃試験場区域内となり、中山神明社に合祀されて虎野の大森社はなくなり、藤原古墳郡のみとなった。

「由緒調」によると、堀河院御宇康和年中（1099～1105年）に、伊勢の神官荒木田某がこの虎野に初めて一社を勧請し、大明神と称した。以後二百余年間人々はこの大神を斎き祭った。南北朝の頃にはこの大神を人々は絶え間なく参詣した。それから百余年後の延徳（1488年）の頃、地頭馬場氏が戸田某と戦い、中山邑が残らず焼失し、村民は他国へ逃げていった。しかしその後文亀年中北三河辺や伊勢から、再びこの地に移ってきた荒木田野守の子孫が、焼残った小舟の中に「大神旧記」を見つけ出し、虎野の神の高徳なのを知った。それで御社の中を拝見すると、古き書があった。何年もたっているため詳しくは解らなかったが、その箱の蓋に文永5年（1268年）の文字が見え、その裏に「奉造営ト在リテ数百余年造工ヲ怠リシ故、今度営ミ奉ル云々」とあった。

つまり文永5年より数百余年前ということは、大和時代の末には虎野大明神がこの地に鎮座されて

いたことになる。

又、小中山（中山字北郷）では、田戸神社（祭神は尾茂太留命）、御嶽神社、六所神社（祭神は猿田彦命）を中心に祭りが6ケ所で行われるが、この田戸神社の近くに、弥生貝塚および縄文後期の八幡上貝塚と田戸貝塚がある。その上この近くは、「宇治山田の森」という聖域になっていて、ここの木を切ったり、落葉を拾って持ち帰ってもたたりがあると言われている。一方、田戸神社の御身体は石である。中山の歴史家清田和夫氏によると、今は行方知れずになっているが虎野の大明神の御身体は「虎石」であるという。又、この渥美半島先端は、伊勢神宮の外宮域となっていて、神官達も中山に多く移住してきている。その上伊勢にも「宇治山田の森」があり、その地の宇治山田神社は倭姫命の時から形をとったが、それ以前は形がなかったらしい。さらに、渥美の宇治山田の森から少し離れた東方に「虎石」が鎮座されているように、伊勢も宇治山田の森から少し東方に行った朝熊川と五十鈴川の合流点に「虎石」が鎮座されている。そしてその「虎石」の上には色々と奇瑞を現した二面の鏡があって、その鏡を永い間小蛇が守っていたという記載が『神宮要網』にある。鏡は吉野朝まで「虎石」の上にあったが、今はすぐ近くに小社を建ててお祀りしてある。『神宮要綱』によると、この「虎石」を「鏡の宮」といい、皇大神宮の摂社としている。一説には、この「鏡の宮」が伊勢神宮の元社ともいわれている。

一方、二見が浦の夫婦岩の東北東650mの海中には、「興珠神石」（嘉永7年11月の大地震で沈んだ）と呼ばれる石があった。その石は沖からやってくる御霊を受ける石であったという。宇治山田の森の中の、石と土盛りで造られた揺拝所は、「興珠神石」と「虎石」を直線でつないだ延長線上にあり、そこは、猿田彦命が二つの石にむかって御供えをし、沖から来られた神霊を拝する所であった。

以上のことから、この「虎石」を御神体とする大神は、猿田彦命（紀元）以前の人であり、猿田彦命の始祖であると考えられる。なぜなら、日本人は古代に於て、自分たちの先祖やその地を治めた人を神として祀ったからである。

祭りの構造

（1） 聖石信仰

時の為政者は焚書を行い、自分たちの都合のいいように歴史を書き換えるのを常とする。そのために、焚書を免れた古文書や他国の歴史書との照合により、渥美半島の古代を究明していくこととする。

田戸神社の御祭神は尾茂太留命である。『秀真伝①』の中に、穆王（周王）が西王母を訪ねて千代見草を求めたという穆王伝説がある。その中に国常立命の国の西にクロソノツミテ国があって、その王がアカカタのトヨクムヌであったとある。『宮下文書②』では、国之常立命の子がトヨクムヌで、王妃がアヤカシコネとなっている。さらにトヨクムヌが早く死んだので、アヤカシコネは国常立命の弟のクニサヅチノ命の子尾茂太留命と再婚する。この2人の子が少彦名と事代主となっている。そして尾茂太留命は『秀真伝』ではコロヒンキミとなっているから、中国大陸の崑崙王である。崑崙とは天山のこととも、弱水の源にある山（原義はアララト山）とも、インドシナ半島南東部にあるクロマンデル島ともいわれる。崑崙船というと南蛮船であり、林邑船をさす。つまり地名遷移といって、古

代の人たちは、自分達のいたところを、同じ地名で呼んで足跡を残したから、トンド十六国の中のアンガ国がたてた林邑国（チャンパ国）のチャム人が、天山にいた月氏とつながっていたことになる。インドネシアの銅鼓には月氏の図があることもその一つの証拠である。又『後漢書』西域伝大秦国条に次のようにある。

大秦国は海西に在るを以て亦海西国と云う。金銀希玉類を多く、織物香等を出す。安息、天竺と交市して国民富饒なり。その国の西に弱水あり、西王母の居所に近く又日の没する所に幾しと。〔『中国神話ルーツの謎』131〕

しかも『仏祖統紀』の注でペルシャ国を「大秦」とするとある。仏典という中国人の歴史偽造に毒されなかった唯一の資料の中で、「大秦」はグレコ・バクトリア国（パキスタンとアフガニスタンの北部にあるヒンドゥークシュウ山脈とアム・ダリアにはさまれた地域）のことであり、バクトリアを「大夏」と書いているのである。鹿島氏はそのことをふまえ、『史記』秦本紀はアケメネス・ペルシャ史の借史であるという。仏典でギリシャ領バクトリア（大夏）を「大秦」と書いているから、ペルシャからバクトリアを奪ったアレクサンドロスとその後継者のバクトリア王ディオドトスは「大秦」の王なのである。さらに弱水は、『桓檀古記』③ によるとユーフラテス河のことであり、中国の秦がアケメネス・ペルシャの植民地だったから、前出の『後漢書』西域伝大秦国条の西王母の居所はウラルトゥということがわかる。要するに崑崙王は、中国大陸をも支配したアナトリアを中心としたウラルトゥ（今のトルコ、フツリ人のビバイニリ諸国）の王ということになる。『秀真伝』は本質的にはシルクロード史で、南海系の大物主が自分達の歴史と合成したものだったのである。

『倭人興亡史』はウラルトゥを武伯と書き、ウラルトゥが日本のウガヤ王朝であることをしめしている。月氏は古代バビロンを支配したカッシト人の子孫で、『桓檀古記』の檀君朝鮮の王家であった。

＜かあか祭り＞の行われている渥美の西浜海岸には、まぼろしの植物といわれるシルクロードの植物（ユーラシア大陸の植物）の葉菊草が自生していることからも、シルクロードとのかかわりを否定できないだろう。

＜かあか祭り＞が行われる小中山の六所神社は御祭神が猿田彦命で、中山の八柱神社はクニサヅチ命である。クニサヅチ命は前出によると国常立命の弟で、尾茂太留命の父であるから、クニサヅチ命の国はウラルトゥであり、鉄部族である。しかも、八柱神社は今「御地の宮」といわれ、もとは八王子神社といった。そして祭神がクニサヅチ命なのに、ここでおこなわれる＜おたよのたよたよ祭り＞の歌は、「天王さんにも、お白餅あげたら……」となっている。二見の「興玉神石」のある海岸近くにも八柱神社（もとは八王子神社）があり、近くに牛頭天王を祭神とする天王社の松下神社がある。人々は12月25日にその松下神社で「蘇民招来、巨旦招来」と書かれたお札を買って家の玄関に下げ、一年間の家族の健康を願うという。

焚書を免れた『遼史④』太祖本紀は契丹民族の主神を「君基太一」と書いているが、本書第1章から第10章までの神話篇では檀君桓因と桓雄もしくはスサノオの尊と思われる神が主神となっている。さらに第42章は「奇契丹燕」または「炎帝」が主神と書き、第24章は「奚契丹爰」は神子耆麟馭叡

の別号なり」という。さらに第四十六章は祖王「葛禹圖可汗」の葛禹圖はかぶとであり、可汗は日神のことといっている。そして第20章では「太祺毗」族、即ち太一神の諸族として「姜、濮、高、畎」をあげ「四嶽」としている。

牛頭信仰と太一神信仰は契丹民族がもっていたのである。「太一」とは『星経』によると「天一星の南東半度にある星の名」であり、漢民族の福神財神とする神である。

又契丹民族の祖については『遼史』世表に、次のように書いてある。

「庖犧氏より降って、炎帝氏、黄帝氏の子孫衆多となれるが……四方に君たる者に二帝の子孫多し。之を宇文周の書に考うるに、遼はもと炎帝の後なりと……蓋し、裔葛烏菟という者、世々朔陲に雄たり。のち（匈奴の）冒頓可汗の襲う所となり、鮮卑山を保って以って居り、鮮卑氏と号す。既にして慕容燕之を破り、その部を分って宇文といい、庫莫奚といい、契丹という」〔『日本神話ルーツの謎』178〕

庖犧氏（伏犧氏ともいう）は、魚人オアンネスの説話を持った前3500年ごろメソポタミアにやってきた蛇身人首で象徴されるシュメール人である。唐のとき『史記』に司馬貞が付加した「三皇本紀」によると、庖犧氏がくる前は、すでに小規模の共同体が点在し、大河による灌漑農耕を始めている民族がいた。彼らは中央に神域を持つ一種の神殿共同体を作っていた。

魚人オアンネスの神話は次のようである。

（1） バビロンに色々な種族が集まり、カルデアに住んでいた。（2）その後アラビア海のバビロニアに接する地方から、魚の体をしたオアンネスがやって来て文字と種々の文化を教えた。（3）この後にオアンネスに似た（魚の体の）別の動物が現れた。〔中国神話ルーツの謎』29〕

『三皇本紀』とこの神話を精読すると（1）が燧人氏、（2）が庖犧氏（3）が女媧氏で、（2）と（3）が蛇身人首のシュメール人であることがわかる。

最古の絵文字はエラム人が作ったエラム文字であり、エラム・ドラヴィダ語族がアルメノイドと混血して古代エジプト人に文字を教えた。又「三皇本紀」に「庖犧氏は陳に都して牛羊豕を家畜した」とある。陳はエチオピアのことだから、その意味はシュメール人がエジプト第一王朝を建て、エチオピア（上エジプト）に都し、牧畜を行ったとなる。

以上のことからエジプトに文字を教えたのは庖犧氏なのである。鹿島氏も言っているが、バビロンのシュメール人またはエジプト第一王朝人は、ユーフラテス河を表音する庖犧氏に相当するのである。エラム人は地中海民族と古代アナトリア民族（今のトルコ）の合成であるというが、巨石文化をもち、蛇身信仰があった。庖犧氏が蛇身人首だということはそこからきているのであろう。庖犧氏はエラム人だから、エラム人とシュメール人は同族なのである。

鹿島氏は、「庖（伏）犧氏はアナトリア民族の子孫にあたるフツリ人の訳語であろう」という。だとすると、尾茂太留命も国常立命も、クニサヅチ命も元祖はシュメール人の庖犧氏であり、鉄部族のフツリ人なのである。つまりウラルトゥを武伯というが、扶余⑤の伯族の祖がウラルトゥのフツリ人ということになり、尾茂太留命は扶余の伯族である百済王家や日本の天皇家につながっているのであ

る。

前出の『遼史』世表に、庖犧氏の末裔が炎帝と黄帝だとある。『史記』五帝本紀の黄帝の記述は『中国神話ルーツの謎』によると次のようになる。

黄帝は少典の子で、姓は公孫、名は軒轅である。時に神農氏（炎帝）の子孫の時代であり、諸候は互いに侵伐しあっていた。黄帝は諸候を征伐したが、蚩尤だけは征伐できなかった。黄帝は炎帝の子孫と阪泉の野に戦ってついに勝った。蚩尤が天下を乱したので、黄帝は涿鹿の野で戦い、蚩尤を虜にして殺した。

メソポタミア最古の征服者で、遊牧軍事力を結集して、シュメール、アカッドを統一したアッカド王サルゴン（前2331－2278）の歴史と黄帝を照合すると、まったく一致し、次のようになる。

サルゴン（黄帝）は、キシュの祭司の妾（少典）の子である。ラガシュ王（神農）ルーガルアンダ（前2351－348年頃）が激しい苛政を加えたため、民衆が反乱し、諸侯が権力闘争にふけった。前2340年ごろ、ウンマ王ルーガルザグギシ（蚩尤）は、ラガシュを襲撃して完全に破壊した。サルゴン（黄帝）はキシュ王ウルザババを倒して王位を簒奪し、アッカドを都として領土拡張の遠征を行った。前2315年ころ、ルーガルザグギシはシュメール人の知事50人を率いて北進し、アッカド領ウグバンダ（涿鹿の野）でサルゴン（黄帝）と戦った。サルゴンはルーガルザグギシを虜にし、南下して、ウルク、ウル、ラガシュ、ウンマ、ニップールを征服し、ルーガルザグギシをニップールのエンリル神殿の門前に晒して殺した。〔『中国神話ルーツの謎』128～130〕

以上のように、黄帝はサルゴン、蚩尤はウンマ王ルーガルザグギシ、神農氏（炎帝）はラガシュとなる。このあとアッカド王はリムシュ（少昊）、マニシュトス（堯）、ナラムシン（舜）と続く。『史記』では「炎帝の子孫の縉雲氏が賄賂をむさぼり、人々がこれをトウテツといって憎んだ。舜はこれを流刑に処して辺境に移した」とあり、「三苗を三危に放逐した」とあるが、これはバビロン史のナラムシンが「海のかなたの都市三十二王」を破ったにあたる。ラガシュ王エアンナトムは、インドシナ半島のマカン王と称した人だから、炎帝もマカン王ということになる。その後バビロンの北方では、ディヤラ河上流のグート族（指揮者はシャルラク）が南下して、ナラムシンは戦死してしまう。ナラムシンのあとのシャルカリンヤツリ（商均）のとき、グート王エルルによってアッカドは滅びる。このことを『桓檀古記』の「檀君本紀」に『古記』に曰う、として、「唐堯の時、王倹は檀国より来りて阿斯達の檀木の墟に至る」とある。鹿島氏によるとこの王倹の説話はグート族のシャルラクがディヤラ河上流からアッカドに侵入したことを意味するといい、王倹の次が扶婁なので、この扶婁がグート王エルルだという。グート人はこののちアッカド王になり、熊トーテムを持っていたが、夏の部族（熊トーテム族）がグート人に協力したからである。これが「王倹が熊の部族と連合した」という説話になった。

古代において、1つの部族は、他部族と自分たちの部族を区別するために、独自の神とトーテムを持った。夏（ウル）王朝はやがて殷（イシン）王朝に移っていく。前出のように『史記』は、漢時代以前まではオリエント史の借史であるから、中国最古の殷国の王、黄帝の一族は虎のトーテムを持っていたので、殷国の中に熊トーテム族と虎トーテム族がいたことになる。

また『三国遺事』に「檀君桓因は帝釈天桓因ともいう」とある。帝釈天はインドの暴風神インドラ

のことで、パンジャブ・アーリヤ人がインドに持込んだ神である。この人たちがダゴンの信仰[6]をもつアラビア海の海人（ユダヤ人）とガンガ流域または朝鮮で合流した。それでダゴンを壇君、インドラを桓因と書いて合成したと考えられる。前出の『遼史』と考え合わせると、契丹民族は壇君を主神とするインド系部族と、太一神を祀る姜、濮、高、畎の混血であり、壇君と太一神を習合させた民族であるということができる。

『遼史』太祖本紀第五章に神系三族として、「或いは云う。神祖名は圖己曳乃訶斗、號は辰沄須嵯珂なり。初め鑿父の陰に降り、事に肇めて辰沄氏有り。鞅綏の陽に居り、載ちまた辰沄氏有り。これを二宗となす。別に神統を嗣いで東冥に顯るる者を阿辰沄須氏となす。その後寧義氏、名を五原諸族の間に著はすと」とある。浜名氏の注に「トコヨミカドは『常世命』で、常世国の王のことである。常世国は根之堅州国で、その王はスサノオ命である。また『鑿父の陰』は遼西の鑿無閭山のことで、粛慎が建国したところである。『鞅綏の陽』は平壌で、辰国の建国したところである。『東冥』は東海のことである。『阿辰沄須』のアシは豊葦原のアシ、秋津島のアキ、倭のアイと同じ、ムスは蒸すの意で万物成生を表す。高皇産霊（ムス）氏であり、スクナヒコナノ命が出雲に来たとき、高皇産霊命が『これはわが子なり』と云った」とある。〔『日本神話ルーツの謎』184〕

『遼史』とユダヤのダゴン神話と檀君神話を総合すると、アッカドを滅亡させる原因となったエラム族の分派のグート王シャルラクが、トコヨミカド辰沄須瑳珂であり、神祖の檀君王倹である。檀君桓雄は王倹の子供だから、檀君神話によると王倹が宇宙神エル（ダゴン神話ではダゴン）で、桓雄がダゴンの子で牛頭人首のバアル神となり、スサノオとなる。ここでは檀君王倹がバアル神で、王倹以下の諸王が「バアル（スサノオ）の子」ということであろう。バアル神は蘇民将来伝説のもとである「過ぎ越しの祭り」の伝説を持っている。M・ウェーバー氏は「ベドウィンの戦士にはもろもろの悪魔からほごされるため、門に血を塗り、血を食べることを禁止する『肉なべのオルギア』があり、これが「過ぎ越しの祭り[7]」の原型であるという。そうすると朝鮮と契丹の例は門に血をぬるからベドウィンに近く、日本の蘇民将来説話は『旧約聖書』の中の「過ぎ越しの祭り」に近いからユダヤ説話から作ったということができる。

第5章を意訳すると次のようになる。

神祖の名はトコヨミコト（檀君王倹）、号はシウスサカ（シャルラク）である。初めユーフラテス河のほとりにいて、（グート人の）辰沄氏を称えた。またザクロス山脈からエシュヌンナにいたる地に建国したカッシュ人があって、この2族がわれわれの宗祖である。別に神祖の末で、アビシニアのオッフル国とその植民市である東表国をたてた者をアシムス氏（アビシニア人、エブス人の王）といった。のちにニギハヤヒ氏（シャキイ族の王）が出て、名を五原諸族の間に顕した。〔『日本神話ルーツの謎』189〕

「鑿父」はユーフラテス河のことである。カッシュ→アッシュ→鞍綏となり、「鞅綏」は「鞅氏」すなわち月氏で、バビロンを支配したカッシュ人であり、「鞅綏の陽の辰沄氏」はカッシュ人の王家だろ

う。『桓檀古記』によると、カッシュ人はエラム人に圧迫され、前千年頃インドに移動したが、その後もヴァン湖周辺のウラルトゥ王国がエラム人と抗争を続けた。

ウラルトゥの祖王アラメは、バアル神の恋人のアラメアを主神とし、その神名をとっていたから、「アマテラス」という神は、その女神とウラルトゥの祖王アラメの両者を合成したものと考えられる。なぜなら日本にきた尾茂太留命の父の国常立命がウラルトゥの祖王アラメであり、ニニギ命はアラメ王の孫イシュプィニッシュだからである。『北倭記』でもアマテラスを男神とし、鎌倉期の『扶桑略記』や伊勢神宮の神官荒木田神主家の伝承にも天照大神は蛇で、斎宮はその后であるとあるから、伊勢神宮の祭神は男性の蛇神であったといえる。また『秀真伝』と『遼史』から、少彦名命の父尾茂太留命が高皇産霊命となる。『桓檀古記』大震国本紀によれば、崇神（ミマキイリヒコ）すなわち百済の近肖古王は扶余の末王依慮で、鮮卑の慕容廆に討たれ、亡命南下して倭王となったとある。ということは、日本史の崇神の先祖は扶余王家の王でなければならない。

『遼史』太祖本紀第20章に東夷諸族について次のように述べる。

神統逖諸として烋ならざる處なし、義を阿祺毗に取って以て族稱となす者は、曰く阿靳、曰く泱委、曰く淮委、曰く潢耳、曰く藩耶なり。〔『日本神話ルーツの謎』224〕

「藩耶」は扶余（庖犠氏、フツリ人、エラム・ドラヴィダ語族と地中海民族の混血）の伯族で、ウラルトゥの古名ビバイニリをさし、その住民はシュメール人の一派である。前出の魚人オアンネスの神話から、庖犠氏はインドに入る前にメソポタミヤにいた。要するにアキヒ族はインダス文明の担い手と考えられているスキト・ドラヴィダ系のブラウイ族と、現在アッサムやチョーダナグプルにいるナーガ族やカーシ族などのアジア系諸民族なのである。つまり、シュメール人のなかにはアジア人がいたのである。さらに、鹿島氏は「前述のアジア民族の主力は秦の建国以前は華北にいて、秦によって長城の外に駆逐された。その東夷が一括してアキヒ族という自覚をもったのではないか」と述べている。扶余族の古老が「私は亡人（亡命者）だ」といったというから、扶余族がかって中国にいたことは確実である。

以上のことから、扶余族を含むアキヒ族は、古代においてオリエントを支配したが、セム族の侵入後東夷の主流となり、秦以前の中国を支配したシュメール人とエラモ・ドラヴィ語族なのである。

第20章の『神統志』を意訳するとつぎのようになる。

神統は連綿と栄える。宇宙神アン・キまたはグート王シャルラクを祖神とする者は、アキ（シュメール人）泱委（月氏）淮委（アラム族）、潢弭（アビシニア・オッフル）、藩耶（ビバイニリ、扶余伯族）である。主神を太陽スーリアとする者は、姚（ルウイ）、陶（ヒッタイト）、句黎（ギリシャ）であって、陶には皐（カッシュ）、陶（ヒッタイト）、唐（トカラ）の三族があり、黎（ギリシャ）は八族に分かれる。主神を水神ニンギルスとする者は、ラガッシュ、ディルムン、カルデア人である。主神を太一神にとる者は、山民であって、五族の対婚を行って五族制を採った。初め四嶽があったが、のちに九伯となった。思うにその言語が類似しているものであろう。姜、濮、高（チュルク）、畎（苗族）などがこれに属する。以上をすべて夷と称するのは神の一致による。これらの諸族は同じ神

を祀る同胞である。〔『日本神話ルーツの謎』244〕

第20章は、契丹民族の構成民族をいっているのである。

ところで、『高千穂神代文書』によると、鎌倉時代に宮崎県高千穂荘は熊野の神領だったとあり、日向と熊野は同系の海人がいたことがわかる。長沼賢海氏は、源平時代から熊野は海賊の基地だったといい、鹿島氏はもともと紀伊というのは鬼国と書き、フェニキアの表音だという。吾郷氏によると丹代貞太郎氏が『伊勢神宮の古代文字』に「津軽結縄法」と題して結縄文字を転載しているという。結縄文字はキープ文字のことで、古代のエジプト、インド、中国、中央、西アフリカ、南太平洋諸国、南、北アメリカなどにその証拠が残っているが、戦後世に出た『東日流外三郡誌』には、キープ文字のイラストも記されている。明治の中頃まで、キープ文字が沖縄の質屋で使用されていた事実もある。『桓檀古記』の「三聖紀」の注に、「倭辰、餘国、或は横書きし、あるいは結縄し、或は鍥木す」とあり、インド西部にあったという海人国家のアンガ国⑧、アンガ国がベトナムに移動して作ったチャンパ国、八重山島、津軽、契丹、ハワイ、インカなどで行なわれたキープはもともと倭人の文字であり、海人文字だったのである。

鹿島氏は『倭人大航海の謎』の中で「東アジアで最も古いキープは、インドシナ半島東南岸にすむインドネシア系の部族で、チャンパ国をたてたチャム人のものであり、『東日流外三郡誌』には、アソベ文字、ツボケ文字、荒吐文字、鳥トーテム族の宗教的な文字である鳥形文字が巻物に入っている」という。

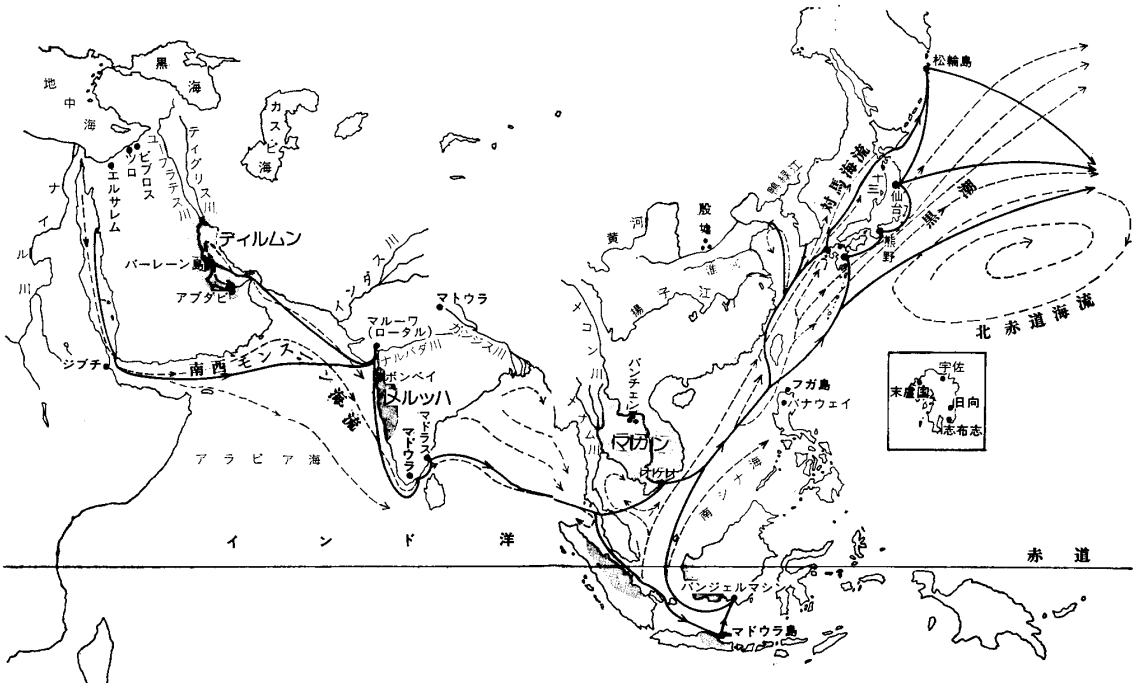
熊野は神代文字即ちキープ文字の宝庫といわれている。本宮も新宮も速玉神社も護符は鳥形文字であり、キープ文字である。又五十鈴川のほとりの朝熊山には岩舟弁天というアマテラスが乗ってきたといわれる舟を祀った神社がある。これらのことから紀伊半島における海人族の存在は確実である。キープがあれば文字はほとんどいらないことは「歴史読本」〔臨時増刊1981—12〕で佐治芳彦氏が言っているが、日本の縄文期以前やチャム人のバンチェン文化に文字がなかったのは、キープ文字を使っていたためであろう。

又鹿島氏によると、「イスラエルのソロモン王の漢字書きは大物主と書く。また『秀真伝』では大物主命の王妃が山作美昆女であるとなっている。アラビア半島のイエーメンの王族であるサバの女王が大物主の王妃であり、この人々がアンガ国を建てた時に、その水軍がチャム人であった」という。つまりイエーメンのサバ国の人々がソロモンと共同してタルシン船を作ったのである。そしてインドのアンガ国をたてた後で、インドシナでチャンパ国をつくり、ボルネオの耶馬提国をつくった。

前出の『遼史』の歴史部分の大半が『費弥国氏州鑑』であり、しかもその前文を意味する「鑑」であるということは、契丹民族が賁弥氏の子孫だということである。殷と箕子朝鮮の王家は契丹であるから賁弥氏、邪馬壱国の卑弥呼と壱与も賁弥氏、そして契丹王家の耶律部も賁弥氏ということである。卑弥呼、賁弥氏、賁弥国氏は同じ意味で、賁弥国の「国」はフェニキア人が持っている表音文字だったのである。

殷の遺跡には、マレー半島だけしかいない大亀が見られ、バンチェン・マレー半島のつながりは否

図1



海のシルクロード

定できない。殷の青銅文化の直接のルーツがメコン上流のバンチェン青銅文化であることは、時代からいって疑いない。またこのバンチェンに彩陶文化をもちこんだ人々を、鹿島氏は、「アッカド時代の海人であるディルムン、プント、メルッハ人と、その子孫であるエブス人、フェニキヤ人などである(図1)」といっている。

以上のことから、『遼史』の「費弥国氏洲鑑」とは、フェニキヤ族国家の前史だったのである。キープ文字をもっていたので自分たちの歴史を書かなかったフェニキア人が残したこの史書の存在は、世界史を知るうえで重要なものであるということができる。

熊野神社本宮の神官で、中臣宗家九鬼家(くがみけ)の秘蔵する『九鬼文書(くがみもんじょ)⑨』の蘇民将来伝承の中に、✡印がでてきて、次のように書いてある。

漂浪神は九鬼家に泊り、その夜嵐があったが、九鬼の一族のみが助かり、他の人々はすべてほろびてしまった。神の出発ののち九鬼家の軒下には✡印のついた木の札が下がっていたので、人々はこの漂浪の神はスサノオであったことを覚った。

この✡はダビデの星を表し、今日でもユダヤ民族のシンボルである。

熊野講は伊勢よりも古い。日向と熊野は同系の海人がいたから、熊野講は日向にいた大物主族または大伴氏のシャーマンの忌部(いんべ)がやったと考えられる。又熊野本宮の第3殿の祭神は高倉下命(たかくらじのみこと)である。高倉下命は九州の国東(くにさき)半島にあった金官加羅(きんかんから)の王である。ニギハヤヒ命が高倉天皇時代に天香具山命(あまのかぐやまのみこと)と名のったのだが、別名を高倉下命といった。以上の事から、紀伊半島には、大物主族とニギハヤヒ族がいっしょになった契丹諸族がいたと断定できる。

ところで先に、ヒッタイトの女バテ・シェバを母に持つユダ王ソロモンが、アラビアのイエーメンの女王サバと共に、ヒッタイトの製鉄技術者たちをタルシン船に乗せて、前1000年頃インド大陸やマレー半島、日本の九州の国東半島に派遣したと述べた。その人たちの国を日本では狗耶韓国(くやかんこく)とか金官(きんかん)

加羅とか駕洛国とか東表国というのである。

東表国のあった国東半島には前7世紀に東洋最大という製鉄遺跡があり、赤土から鉄を取っていた。ユダヤ人の『旧約聖書』にある採鉱法が行われていたのである。この遺跡は九大坂田研究室によって調査され、国東郷土館に前7世紀と鑑定されたみごとな鉄剣と鉄鏃が納められた。鉄は弥生時代とされているが、すでに縄文時代からあったのである。つまり九州豊国（東表国）と朝鮮半島を支配した東表国の王家は、日本史の孝安王朝で、のちの九鬼文書を持つ中臣氏であったということである。東表国は3世紀の終わり頃猿田彦の秦王国を服属させた。鹿島氏は「東表とはソマリアの旧名オッフルの漢訳で、その王クルタシロスはタルシシ王だ」という。また「銅鐸は稲作文化圏のトーテムだから、猿田彦の一族が中南越の苗族を率いた秦人の亡命者であり、日本列島に侵入して弥生農業を始めたことを示すものである」という。

『秀真伝』は、猿田彦をナガタ作田彦と記し、作田彦が「われはイセのソ、サルタヒコ」と称したとし、「ウカワカリヤにミアエして……」と述べる。「イセのソ」とは伊勢祖王のことであり、「ウカワカリヤ云々」とは、大王の仮屋に伺侯したということである。

『伊勢国風土記』には「神武が天日別命に命じて伊勢国王、伊勢都彦を東に追放した。伊勢都彦は八風を起こし海水を吹きあげ波浪に乗って東の方に行く」といい、「波に乗って東に去った」とのべられているという。

『神皇紀』作田彦系図を分析すると、作田彦は遠祖が南朝ユダ王家となっていて、中間に秦の始皇帝らを介している。滝川政次郎は、華南から来たインドネシア系の隼人族と阿曇族で構成される猪甘部が、漢の武帝を逃れて日本に移動したという。そしてこの人々を率いたのが秦王朝の一族で、わが国の猿田彦であるという。鹿島氏も「『史記』によると漢の武帝のとき蒼梧（郡名、広西省）の秦王がいる南越の民が、韓半島と日本列島に逃れた。かれらは北倭であるとともに扶余の猪加であり、わが国の猪甘部であった。彼らは文身（入れ墨）の風俗があり、竜蛇のトーテムをもっていた。『東日流外三郡誌』にも、安芸、紀伊、越に三毛族がいたとある。猿田彦が率いていた苗族は三苗とも三毛ともいう。『山海経』では毛民となっている」と述べ、さらに「グレコ・バクトリアのなかにユダヤ人のラビがいたが、後にバクトリア人が秦国をたてた時、始皇帝はラビを殺して焚書した。そして秦が滅びた時、この連中が亡命して大和盆地に秦王国を作った。『宮下文書』では猿田彦は秦氏の桜田彦の子孫だが、秦河勝が描いたという猿田彦の画像というのが残っている。猿田彦のサルはエルサレム王のサレということだろう」という。

蒼梧の秦王一族は、『史記』によると黄帝の子孫であるから、猿田彦にとっても黄帝は遠祖になるのだろう。猿田彦の秦王国は大和盆地だったのである。紀伊から猿田彦を追放した神武は高句麗と合体した扶余の人で、東表国へ入り、大和盆地を占領下におき、やがて佐賀県と福岡県にまたがって伊都国を作った。

猿田彦一族も中臣氏一族も神武一族も東表国にいたから、伊勢の蘇民将来伝説は、東表国の一族が持ち込んだということになる。

前出の契丹文書である『遼史』太祖本紀の第15章によると、牛角のシャーマンとなっている「キリ

コエ」は、のちに沖縄で聞得大君とよばれることになる。ということは元来はバアルの神官であり、箕子朝鮮の神官となって、東表国やその分派の新羅国にもいたということである。鹿島舜氏は新羅が白村江の戦勝の後、天武王朝として日本列島を支配し、東表国が巨大古墳を造って丹波にたてた「元伊勢神宮」を伊勢に移したという。たしかに天の橋立の籠神社には海人族の家系図があり、それが昭和54年に国宝に指定されている。伊勢の歴史家間宮忠夫氏は「伊勢神宮の材木を運ぶ時太一神の太一と書いたのぼりを立てて、五十鈴川（神道川）を筏でのぼっていき、草むらに祀ってある『滝祭神』の所から内宮域へはいっていく」という。また大道の石燈龍にも「太一」と書いてあることからも、伊勢に於る、太一神を主神とする契丹族の存在は確かである。

『遼史』第5章の神系3族についての文中にある「東冥」は東表国のことであるから、アビシニア（エチオピア）とオツフル（プント）の九州植民市である。ダビデが建国した当時、エルサレムを支配していたエブス人は、エジプトから撤退したかってのヒクソスで、ヒクソスになる以前はアビシニア人であつた。この国が後に朝鮮史の駕洛国又は金官伽羅になったのである。王姓は金氏、中臣氏で、新羅の金姓王朝又は蘇我氏はこの分派であろう。

東表国の宇佐八幡には蛇神信仰があり、それを「トウビョウ」という。東表国はこの意味でもある。アッサムのカーシ族はオーストロアジア語族で日本人によく似ている。その仲間のワ族は倭人の直接のルーツであり、エジプトに発生したという有肩石斧[10]に似た鍬を使って稲、ハトムギ等を作り、巨石文化を持っていた。彼らは「トウレン」という蛇つき信仰をもち、蛇神に人間のいけにえを捧げて守ってもらった。そしてこの蛇神信仰は雲南山岳のワ族に伝承された。宇佐の「トウビョウ」のルーツはこの「トウレン」だろう。

殷と箕子朝鮮の王族は、前出のように黄帝がアッカド王であることから、その子孫はオッフル国と同盟してアラビア海に君臨したディルムン（バハレーン島）とマガン（オマーン）の海人であることがわかる。彼らは魚人オアンネスの神話と考え合わせると、アビシニア人とともにエジプトを侵略してヒクソスとなり、エジプト退去ののち、バンチェンをへて殷に入っとかんがえられる。バンチェン文化と殷文化の類似はすでに述べた通りである。蘇民将来信仰（過ぎ越しの祭り）、正確にはその祖型の「ベドウィン神話」を持っていた人たちは、契丹三族のシャーマン「キリコエ」の一族、契丹人の祖の箕子朝鮮、さかのぼって殷、アラビア半島のベドウィン族となり、みなつながっていたのである。アラビア半島ではテントの入り口に血を塗るという肉なべのオルギアを行っていた。

東表国の子孫は中臣氏、ト部氏、阿比留氏などになった。鹿島氏は、阿比留はヘブライ人の古名アピルのことで、アピル族はインドの牛飼カーストのアヒール族になったという。さらに朝鮮語では「牛」をソ（蘇）と読むが、東表国のちの金官加羅の王姓を「金」とするのは、黄金の牛バアルを意味するという。

箕子朝鮮とは、前1000年頃バビロンのイシン王国（殷）が滅び、その王族がバハレーン島に亡命し、カルデア人という海洋民族とともに満州に移って立てた国家である。箕子朝鮮が滅亡した時、一部が扶余に合体し、新大王の時朝鮮半島南部から沖縄に遠征した。これが契丹民族の始まりである。この人たちが契丹の蕭氏や新羅の朴氏になったと考えられる。

さて、渥美半島と伊勢の「宇治山田の森」の山を「よう」と読むが、沖縄の国頭地方では山を「やん」と読み、「やせる」を「ヨーガリン」、「やせっぽち」を「ヨーガフ」というように「や」は「ヨウ」に通じるから、この読み方は沖縄の読み方と考えてもさしつかえなかろう。つまり、言語上からも紀伊半島に上陸した契丹民族の存在は確かなのである。

鹿島舜氏は『日本神話ルーツの謎』の中で「『遼史』第5章の「寧義氏」は『旧事紀』のニギハヤヒ命である。『旧事紀』でニギハヤヒの船長となっているアマツマラは、アラビア海のメルツハ人（マラ族）だから、ニギハヤヒ族はアラビア海を支配したオッフル人の分派ということになる。『桓檀古記』はニギハヤヒの祖を陜野侯裴幣命とし、さらにその遠祖を穢邑の尊ソシモリとしている。『遼史』の第5章によれば、ニギハヤヒと陜野侯の中間に、河南省の宛にいた「宛徐」というシャキイ族の王があるから、その先祖の陜野侯は、シャカを生んだコーサラ国のシャキイ族の先祖であるカルデア人の王をさすことになる。「陜」はカルデア人をさし、幣命はカルデア人の王をいう。またベトナムの文郎国に貉龍君という王があり、『史記注』は、「貉は徐なり」とのべているから、「宛徐」はかって文郎国の王であったらしい」という。

さて、秦の徐福が不老不死の薬を求めて日本へ来たと云う伝承がある。紀伊半島では熊野川の河口付近にある熊野速玉神社近くに、徐福の墓まである。

『神皇紀』の秦徐福系図を見ると、徐福の祖正勝は、華南の楚人であった。黄帝（アッカド王サルゴン）の第4皇子を祖とし、第54代正勝の時周武王に徐姓を賜った。いいかえると、正勝は周武王すなわちアッシリア王アッシュールニラーリ4世にしたがった徐族ということになる。「徐の偃王」はカルデア人の王であるが、『北倭記』では徐氏の王をアグリナロシと言い、この一族は元来ドラヴィダ族系のゴーンド族の鉄工部族アガリアのことらしい。また「徐氏」は河南省の宛に入植し、のちに濊王となって国史のニギハヤヒ族になった。すると徐福の先祖は中国に残留したニギハヤヒの一族ということになる。徐族とニギハヤヒは同族だから、『旧事紀』のいう「ニギハヤヒがアマツマラの船団を率いた」とは、アガリア族がメルッハ族の船団を率いたということになる。鹿島氏は「マラ族とはインド16王朝のカーシ、コーサラ、マガダの水軍であり、カーシ国では王家でもあった。『宛』の原義はメソポタミアのウルであり『徐』はカルデア、カシュドウのドウである」という。

「秦本紀」に「洛陽の韓（マガンの植民市）の謀略によって、秦は運河を作って農地を開墾した……」とあるので、鹿島氏は、徐福の日本渡来を苗族の渡来とした弥生時代の直前ではないかという。アラビア海からやってきたマガン人は農業技術を持っていたから、同じアラビア海からきた徐族が農業を持ってきたのはもちろんのことである。

『帝王史記』に、「諸侯有苗氏南蠻に處り而して服せず、堯征して之を丹水の浦に克すと。三苗と稱するのは南蠻であって荆楚に在り、楚も亦自ら稱して『我が蠻夷』と言っている。即ち三苗は必ず楚の先である。又之に丹水で勝ったと言ふは『楚世家』の『熊繹、封を丹陽に受く』と同じである」という。〔『中国神話ルーツの謎』142〕

三苗の子孫に楚世家があり、徐福や猿田彦の率いた人たちの中に、楚の国の人たちがいたということである。

三苗とは『史記』によると、舜王の時代に中国南部へ追放された黄帝氏の不才の子の渾沌と、少皞氏の不才の子の窮奇、顓頊氏の不才の子の檮杌の一族をいった。いずれも黄帝を祖王とした人達で、殷、周、秦前史を担った人たちである。又縉雲氏（炎帝の子孫）の不才の子の饕餮をも同列において苗族の中に入れた。〔『中国神話ルーツの謎』125〕

「秦本紀」は次のように述べる。

秦の祖先は、帝顓頊の後裔である。顓頊の孫の女脩があるとき機を織っていると、燕が卵をおとした。女脩はこれを呑んで子の大業を産んだ。大業は諸侯の少典の子の女華を娶り、大費を生んだ。大費は禹とともに洪水を治めて土地をひらいた。この大費が柏翳である。大費は大廉という鳥俗氏の祖と、若木という費氏の祖の二人の子を生んだ。若木の玄孫を費昌といい、子孫は中国に居住したり、夷狄の地に居住したりした。費昌は夏の桀王の時代の人で、夏を去って殷に帰属し、湯王の御者になって桀王を鳴条で敗った。大廉の玄孫を孟戯・中衍といい、身体は鳥で人語をよくした。〔『秦始皇帝とユダヤ人』106〕

以上のことから、殷人はマレー海域から北上したアラビア海のカルデア人や、フェニキア人、先住のチュルク族（扶余族）等、三苗といわれる人たちで、楚世家の祖である。殷は鳥霊信仰をもち、その文化は周に受け継がれ、さらに楚世家に続いていく。楚世家の人たちは鳥装をしていたから、大廉の玄孫の中衍を祖とし、神としていた人たちだということである。この海人たちが紀伊半島にやってきて自分達の文化を守っていたが、神武に追放されて、猿田彦といっしょに渥美半島の西浜へ移動したと考えられる。陸のシルクロード渡来系の北倭である契丹諸族の移動である。

渥美半島西浜の弥生貝塚から銅製の刀子や剣、鉄鏃、金銅製鳩目、金環等、殷文化や秦文化を思わせるものが出てくる。さらに堀山田の貝塚遺跡からは、猿田彦の文化である銅鐸が出ているから、たしかに猿田彦一族がいたのである。また弥生時代の藤原古墳群の石室の石材の多くは巨岩である。第1号墳の石室の巨岩は、畳1枚分ほどもあるもので、しかも渥美半島にはない神原花崗岩と凝灰質砂岩である。砂岩は佐久島産であり、花崗岩は三河湾の奥の蒲郡市星越海岸ないし篠島の産であるらしい。それらの巨岩を運んだということは、藤原古墳群を営んだ人々は操船技術に長け、漁業と関わりを持った人たちだということがいえる。また第1号墳から無蓋高坏が出土しているが、これは三重県鈴鹿市（伊勢国）の岸岡山古窯址群で生産されたものである。同形態の高坏は第8号墳からも出土しており、当時の人たちの活動範囲が、三河湾内はもちろん、遙か伊勢地方にも及んでいたことがわかる。漁師に巨岩の運び方を聞くと、「簡単さ。2隻の舟を並べて、双方の船の縁にとどく柱状の木材に縛って垂らした綱に岩塊を縛りつけ、浮力を利用して運べばいいのさ」という。弥生時代すでに巨岩を運ぶ知識があったということである。

又この西浜海岸の伊良湖岬近くにある石堂山にはストンサークルがあり、石の神社もある。猿田彦命と共に、アラビア海の海人やシュメール人、インド人達がこの地にやってきたことはあきらかである。

アラビア海の海人は石を神の御身体とする。伊勢内宮の御身体は奥殿の「石の女陰」であり、「滝

祭神（まつりのかみ）」の御身体は天照大神の前身とされている五十鈴川畔の手洗場の石である。又五十鈴川畔の「虎石」は伊勢神宮の元社ともいわれる。「虎石」は猿田彦と楚人、苗族の祖王であり、中国最古の王で虎トーテムを持った黄帝（神祖）を表わし、「虎石」の上の蛇は蛇身人首で表されるシュメール人(庖犠氏）の祖王（神祖、ウラルトゥのアラメ王、日本の天照大神）を表わすと考えられる。

『遼史』太祖本紀の第1章を意訳すると、

そもそも太陽を考えるに、伝えて曰く、

「神は太陽の如く輝き、言葉ではよく表わしえないが、青銅鏡はよくこれを表わしている。よって鏡を『日神体』と書いてカガミと読む」となる〔『日本神話ルーツの謎』182〕。

要するに「虎石」の上の2面の鏡は神そのもの、つまり虎石と蛇を神として2面の鏡で表わしているのである。

渥美半島の寅之（とらの）大明神の御神体の「虎石」も、同じ意味と考えてさしつかえなかろう。

西浜は「藤原（とうばら）」とも呼ばれ、藤が群生していた。藤は古代に於ては朝鮮にはなく中国の江南しかなかったこと、また、そのころ藤は強力な霊力を持つものとして海人族の衣類に用いられたこと、中国語で藤を藤羅というが、日本語でも藤羅（とうら）といったことなどからみても、中国人の移動はあきらかである。

(2) シトギについて

中尾佐助氏はシトギ（米の粉をねったもの）の発生地と伝播を、バンチェン北東部からマレー半島を経てセイロンに移動したという。日本の場合は、バンチェンから中国を経て入ってきたと考えられる。形を丸くしたシトギ餅は、稲霊を表わすとともに、祓霊、浄化の呪力目的で使用される最古の様式である。

(3) 鳥霊信仰

烏になった子供達の魂は、秦始皇帝の国になる前（周時代の終わり）に中国を支配した鳥装の楚世家の神祖の魂と入れ替わり、神祖そのものになり、村人と共に豊穣を祝うのがこの祭りの意味なのである。古代においては子供達は霊が移ろいやすいと考えられていたので、神霊をのりうつらせて神祖としたのである。また「烏は太陽の運行を司る」といわれているが、太陽の運行を予知したシャーマンとしての楚世家の神祖の力をも、烏になることによって得られると古代の人々は考えたのであろう。

熊野本宮、新宮には、3本足の烏で書かれた海人文字の護符がある。3本足の烏は、太陽の陽気を表わすといわれている。『遼史』で、「神は太陽のごとく輝き」とあるから、3本足の烏は、神の力を表すものなのだろう。

(4) 満月と＜かあか祭り＞との関係

『桓檀古記』によると、檀君朝鮮は辰韓ともいう。「シン」というのはバビロニア神話の月神シンを

信奉することで、月氏やカッシト族をいう。カッシュ人はアジア系の雑種で、シュメール人の第1波であったエラム族の支族のグート人のあと、バビロンを支配した。のちにエラム族に追われ、シルクロードからインドに入って月種王統をたてた。またカッシュ人の別の一派はディルムン人と連合してアラビア海に進出したらしい。月氏はインドネシアの銅鼓に刻まれているから水軍でもあった。なお中国史の月氏はこれとは別に、シルクロードに残って中国に進んだ人々である。

『日本書記』では、「天照大神の勅命によって、地上の保食神に食物を求め、同神を殺したのは月読尊である」とある。さらに「月読尊は天熊人によって殺された保食神の体に実っていた稲種を見つけて、天照大神に献じた」とある。また『宮下文書』は「天照大神の弟の月読尊が、(チベットの) 黒玉河と白玉河の間の地にいた」と述べているから、天照一族 (ウラルトゥの王一族) と同盟した月読尊が、月氏の王であることがわかる。つまり月氏が豊穣の神なのである。満月の日にこの祭りが行なわれるのは、バビロンを支配して農耕文化を盛んにした月氏を象徴する月神の力をもらうことになるのである。月神が農業神といわれるわけは、ここにあるのだろう。

(5) 双魚の意味

網仲間から赤鯛が2尾奉献される。

ウィットフォゲルとフェンクは、『シベリア極東の考古学2』の中で、「契丹では鋳造された黄金の魚佩は双魚佩で、黄帝の権力のシンボルとして戦争の作戦の動員のために符牒として使われた」という。

双魚佩とは、2尾の鯛型の鋳造物をつないだもので、身につけるものである。

この双魚佩は、大物主命の妃の国アユダ国 (コーサラ) と、駕洛国の共通の紋章である双魚文と一致する。要するに網仲間が奉献する双魚は、中国最古の祖王黄帝の権力を象徴し、大漁を意味するものなのである。

(6) 拝火信仰

＜かあか祭り＞ では、烏たちの座っている横に穴がほられ、薪が燃やされる。

『史記』では、天文星占の術の中で、天の28の星宿とそれに割り当てられた12州が北斗の位置方向によって支配されるという。その来因を、呉、楚の国では、熒惑で兆候を調べ、朱鳥の衡で占うという。

熒とは周囲を陣営のように松明でとりまくことをいう。朱鳥は南方の神で、朱い鳥のことである。要するに、周囲をとりまく松明のあかりで朱くなった鳥たちの、朱くなりようで人事百般を占うということである。

＜かあか祭り＞ では、豊穣を願うと同時に、その年の豊凶をも占ったのだろう。

(7) ＜おたよのたよたよ祭り＞ の唱え歌

「天王さんにお白餅あげたら、おらもくいたいカーアカア　いくよも　くるよも　おたよーたよ

おたよのたよたよ」

天王さんとは人々の神スサノオをいい、お白餅は米の粉で作ったシトギ餅をいう。

北九州の遠賀川上流の鞍手郡の村に、子供達が「とよとよ」といって餅をもらいにくる「かあか祭り」によく似た祭りがある。その唱え言葉から「たよ」の「た」は「と」に通じると考えられるから、「たよ」は「豊世」の意味となり、次のようになる。

「スサノオの神様にお白餅あげたら、おらも食べたいカーアカア、幾世も　来る世も、豊かな世だよ、すばらしく豊かな世だよ」

古代においては、稲の豊穣がその年の豊穣を表すから、稲の豊穣を祝いながら、来年の豊穣を願い、神祖と供食することによってその力を得ようとする歌なのである。

結　　論

古代の人々は、死んでも霊は国の中に留まっているものであり、死者の世界と現世とは行ったり来たり、招いたり招かれたり出来るものであり、生きている人の思いが死後にはかない、しかも子孫のために何回も生まれかわって同じ事業が続けられると思っていた。いつも先祖には生きている人々を加護し、愛し、豊穣を持たらす力のあることを、人々は信じてやまなかったのである。

神の「ヨリマシ」は「尸童」という漢字をあてる。祭には尸と称する童子を神霊の代表者とすることから、子供を主役とする意味は次の2つとなる。子供は神聖であることと、霊の交換が容易であることである。

＜おたよのたよたよ祭り＞ はひたすら祖先の加護を信じ、祖先の顕現を信じ、その年の豊穣を祖先と共に祝い、来年の豊穣を願う海人族の祭りであった。古代において、祭とは神祖と先祖をその地に迎え、供養し、たのしみ、悦び合うものなのである。魂は死後も延々と生きつづけ、働き続けるという日本古来の思想が、そこに生きつづけていたのである。

注

① 紀元1世紀頃、大物主櫛甕玉命とその子孫太田田根子命の編纂。古代天皇家が渡来する以前の支配者である大物主家の伝承。稗田阿礼に暗記させておいたので天武王朝の焚書をまぬがれた重要古文書。『上記』や『宮下文書』のプロト版。『古事記』の種本。

② 孝霊天皇の世に、秦の始皇帝の命を受け、不老不死の霊薬を求めて、中国より船出した徐福が、木日（紀伊）国に上陸し、前215年に富士山麓に落ち着いて、富士太神宮の宮下神官から聞いて書いた日本古代史。『古事記』『日本書紀』で抹殺されたウガヤ王朝の研究の重要史料。『宮下文書』は、昭和の初めに三輪義燕氏が現代文に訳されて『神皇紀』としてまとめられた。未公開部分に、ウガヤ王朝がシナ大陸の西から東に移って来たと書いてあるといわれている。

③ 李朝鮮初期に編纂された史書で、朝鮮で焚書を奇跡的にまぬがれた重要古文書。

④ 遼の王族耶律羽之が編纂した契丹古文書。後に鹿島氏が訳し、『倭人興亡史』とし、さらに加筆修正して『北倭記』とした。

⑤ 前1C―494伯人国。中国文化の影響を受け中国北東部に建国。百済王は扶余族。

⑥ 『魏書』に「桓因（帝釈）の子の桓雄は人間世界を欲しがったので、桓因は天符印3個を与えて治めさせた。その時桓雄は風伯、雨師、雲師らを従えて、人間の360余の事がらを治め教化した」とある。これに対応するウガリットの神話は「最高神であり宇宙秩序の保護者エル（牡牛の形をしていた。妻は女神ア

シュラト）の子をバアル神（主人の意で牛頭人首、タゴンの息子ともいわれる。妹であり恋人は女神アナト）という。バアル神は雲、風、雨とすべての宮廷人を連れて、死の神モートと戦い、神父エルのかわりに世の中を治めた」とある。

⑦ 『旧約聖書』によると、モーゼがエジプトで奴隷にされていたイスラエル民族を率いてエジプトから脱出しようとした時、小羊の血を戸口に塗り、家にとじこもっているようにとの神のお告げがあった。その夜、神の使いがエジプト中を風のように過ぎ越して、目印のない家に生まれた男の初子たちをすべて殺していったが、神の教えに従ったイスラエル人の家は何事もなかった。脅えたエジプト王は暁を待たずイスラエル人の出発を許したので、イスラエル人はそれを記念して過ぎ越しを祭ることを誓った。

⑧ 前6世紀マガダ国に併合された。

⑨ ニニギノ命の皇孫降臨に供奉した天児屋根命の神道直伝の家系である大中臣宗家であり、熊野別当宗家でもある九鬼（くがみ）家（旧子爵）に伝えられた古文書。

⑩ 東南アジアを中心にインド東部から中国南部にかけて分布する平磨製石斧。

主要参考文献

○渥美町教育委員会『三州奥郡漁民風俗誌』(1970) 年
○鹿島舜著『日本神話ルーツの謎』新国民社 (1986) 年
○　右同　『日本ユダヤ王朝の謎』新国民社 (1987) 年
○　右同　『秦始皇帝とユダヤ人』右同。(1987) 年
○　右同　『中国神話ルーツの謎』新国民社 (1986) 年
○渥美町教育委員会『藤原古墳群』(1988) 年
○柳田國男著『柳田國男全集十三』ちくま文庫 (1990) 年
○鹿島舜・吾郷清彦・佐治芳彦共著『倭人大航海の謎』新国民社 (1986) 年
○　右同　『日本列島史抹殺の謎』新国民社。(1983) 年
○伊良湖自然博物館『渥美の貝塚』(1976) 年
○神宮司庁『神宮要綱』(1928) 年
○神宮司庁『神都名勝誌』(1895) 年
○伊勢市教育委員会『昼河古墳群』(1993) 年